『たまのみ』

あるちゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『たまのみ』

【Ｎコード】
Ｎ８８４７Ｕ

【作者名】
あるちゅん

【あらすじ】
大地立也は少し内気な、ごく普通の高校生だった。父子家庭で、幼馴染が二人いて、今日で期末テストが終わりで。全然不満のない平和な毎日。しかし、その日常は唐突に終わる。迫り来る異形を前に、内気な少年はどうするのか？

第０幕　「挑戦者の末路」（前書き）

ようやく、まともと思うものを書いてみます。よろしくお願いします。

第０幕　「挑戦者の末路」

風が逆巻いている夜だった。

風雨が遠慮なく吹き込み、部屋の中は滅茶苦茶だった。

万巻の書は雨に濡れ、秘蔵の霊薬は床に散り、長年続いた研究のアトリエは最早壊滅状態であった。

すべてを理解する、神に挑戦する、そう思い定めた、その根城で、男は泣いている。

血にまみれた最愛の女を抱き、自らの浅はかさを呪い、悔やみ、泣いていた。

時々顔を上げては、開け放された窓を見やり、茫々と涙する。

そして、抱いたものの正体を思い出し、再び顔を埋めて嘆く。

何度も、何度も、挑戦者はただそれだけを繰り返していた。

窓の外の暗闇は、彼をただひたすら突き放していた。

第1幕　「内気な少年・大地立也」　1－1　「父子」

朝、大地立也（たつや）は目覚める。時刻は午前5時58分。目覚ましは6時にかけてあるのだが、いつも一歩手前で目が覚め、鳴る前にスイッチをオフにしてしまうので、目覚まし時計には嫌われるタイプの人間だろうなと、いつも申し訳ない気持ちになる。目覚まし時計を寝ぼけ眼でアンニュイに見つめていると、これまたいつも通りの声が響く。

「たつや～？起きたか～朝飯作るぞぉ！ふぁ～あ」

「うん、今日はパンかな」

覚醒とほぼ同時に襖一枚隔てた隣の立也を朝食クッキングに誘う。父・守のいつからかの日課である。それに洋食でいくか和食でいくか、はたまた特別版でいくかを応えるのが、息子・立也の日課。

「うっし！今日も元気に行ってみよう」

元気良く起き上がって、布団をぼんっと畳み、守は台所へ向かう。だから、しわにならないように畳んでくれといつも言ってるのに、と後で登校前にいつも自分が畳みなおす父の布団を思いやりながら、立也も布団を畳んで、台所へ向かう。

台所では、既に守がトーストを作り始めていた。

「おはようさん、玉子頼むよ！先生」

「うん。おはよう、父さん」

ここでようやく朝の挨拶をして、立也は玉子焼きに取り掛かる。守

はフライパン、というかアナログチックな調理器具と致命的に相性の悪い人で、自分が玉子焼きをつくるということは、戦士がベホイミを使うようなものだと言っている。おかげで、玉子焼きにはそこそこ自信のある立也は、卵を割る。片手で割って、殻が入ってしまわないか、卵白がどれだけ手に付くか、は洋食版朝食時の、ちょっとした運勢占いだ。

ぱりっ、ぱりっ、ぱりっ、ぱりっ

「今日はどうですかな。先生」

「３つ目で殻入っちゃった。でも・・・・・・ほら、取れた。ほとんど被害なし。上々かな」

親子はにっこり笑いあう。全くいつも通りの大地家の朝だった。

1―2　「幼馴染」

「行ってきます」
「おう！今日も元気にかましてらっしゃい！」

父のよくわからない挨拶も、実のところ今日だけは的を射ている。立也は、うん、かまそう、とあまり自分では使ったことのない動詞を心で呟き、家を出た。学校へダイレクトに向かうのではなく、少し寄り道する。

「おっは～よ！」
「わわっ・・・・・・・」

背中に一発パンッとやられ、立也はビクッとする。どうしてもいつも以上にびくっとしてしまう。

「もう・・・・・・歩ちゃん、やめてよ。びっくりするよ」
「なに、今日はやたらリアクション大きいね？なにかあるの？」
「いや・・・・・・・べ、別に」

背中を張られた反応だけで、自分の胸中を測り取る幼馴染・木森歩の洞察力に一瞬冷や汗をかきながら、立也ははぐらかす。

「ふぅ～～ん、ま、いっけどね。おはよ」
「おはよう」

2人して集合場所へ行くと、もう一人の幼馴染・水瀬零が待っていた。

「おはよう」
「おっは～」
「おはよう」

じゃあ、行こうか、とかいう次の行動を促す言葉などなしに、３人は駅に向かう。

「ねぇ、零君。今日のタツおかしいと思わない？」
「・・・・・・・いや？」
「なぁんか、そわそわしてない？」
「・・・・・・さぁ」

普段は自然体で十分表情が硬い零だったが、今日ばかりは強いて表情を動かないように努力した。

「ふぅん。じゃ、気のせいかな？あ、私定期切れっちゃってたんだ。ごめん切符買う」

歩が券売機の方へ行ったのを見計らって、零は立也ににじり寄る。

「映画、まだ誘ってないのか」
「・・・・・・うん」
「折角集合前に会ったのに？」
「・・・・・・なんか、ちょっとそういう感じじゃなくて」
「そこは立也が自分でそういう感じにしないとダメなんじゃないか」
「・・・・・・・う・・・・・・・うん・・・・・・・そう、だよね」
「ともかく、早く言っておかないと、他に予定入れちゃうだろう？」
「・・・・・・・うん、ガンバル」

励ましておいてなんだが、なんて『ガンバル』という動詞の似合わ

ない人なんだろう。とは口に出さないものの、そんな心配が、滅多に動かない表情に出た零に、立也は「ガ、ガンバル・・・・・・・・よ・・・」。零の心配は濃くなる。

今日は、幼馴染3人が通う高校の期末試験最終日である。これが終われば、高校生は夏休みまで開店休業みたなものだ。試験の結果と通知表が補習を命じなければ、まる2ヶ月は青春スイッチ全開が許される。

大地立也は、これを機にずっと、それこそ小学生の頃から気になってる女の子、木森歩嬢と一歩進んだお付き合いをと考えた。幼馴染の零に相談し、一念発起して映画のチケットを買ったものの、購入して二週間、とうとう青春スイッチ発動まで残すところ約7時間というところまで来てしまった。

1―3　「受身」

そしてそれは、いまやあと3時間。お昼休憩が終わって、残るライティングの試験が終われば、もはや青春は走り出す。さすがに零がコテ入れし、屋上での幼馴染3人のランチをセッティングするに至った。

「零君、遅いねぇ」
「う・・・・・・うん・・・」
「もう時間ないし、食べちゃお。私最後に単語確認したいし」
「う・・・・・・うん・・・」

パンを買いに行ったまま帰ってこない零に痺れをきらし、歩は自前のサンドイッチを食べ始める。

「食べないの？しょうがないよ、零君遅すぎ」
「あ・・・・・・あの！」

かますんだ、かます、かます、かます、かますぞ。ところでかますってどんな言葉？と全然関係ないことが頭に反芻しながらも、立也は踏み出した。

「ど、どしたの？」
「あの・・・・・・えっと！きょ、今日テストの後、なん、で、す、が」

ひょっとして初めて見るかもしれない、意気込んだ立也に歩はたじろぎ、じっと立也を見ているしか出来ない。

「え、あ・・・その、僕と、あの、その、え、えええ、えい」
「も、もちろん！あったり前じゃん」
「・・・・・・えっ？」

まだ何も言っても、かましてもいない気がするのだけど、と困惑する立也に歩は続ける。

「だから、テスト終わったら遊ぼって話、高校初めてのフリーダムですよぉ！幼馴染３人で盛り上がるなんて、当たり前でしょ、っていうコト・・・・でしょ？」

「・・・え、ああ・・・・・・いや、あの」
「茜ちゃんたちのお誘いを蹴ってまでなんだから、ありがたく思うこと！以上」
「・・・・・・う・・・・・・・あ・・・・・・・」

一緒に過ごせるならまだましかも、誘ってそれならやっぱり佐藤さん達と遊ぶってなったら嫌だし・・・・・・・

「そ、それで結局言い出せず？」
「・・・・・・は、はい・・・・・・・」

本当に珍しいことにうなだれてしまった零にひたすら言い訳をする立也。

「あ、あの、でも、その、今回は行動したことに、あの、チケットを買った、ってところに意義があったってことで、その、売り場の人に話しかけられたってことが既に僕からすれば大進歩だし」
「・・・・・・立也。本当にそれでいいのか？」
「・・・・・・しかたないよ・・・そういう性格だし・・・頑張っ

たよ・・・」

性格のことなど、「どうせ」風のことを言い出した立也の意固地さを知っている零にはもうどうにもできなかった。大地立也の冒険は終わった。

第1．5幕　「敵対者の暗躍」

敵対者はとうとう掴んだ。神を貶め、辱める機会を。ずっと待っていた、その機会を。

「止めろ！止めてくれ！」

牙を失った挑戦者が、敵対者に懇願する。

アトリエは整然とそれを聞いている。ボロボロなのはその主だけだ。

しかし、その懇願は肝心の男には届いていない。彼の動きは微塵も揺らがない。

牙を失い、愛する者を失った挑戦者に最後に残ったそれを敵対者は無慈悲に持ち去ろうとする。

挑戦者は泣く。枯れたはずの涙があふれて、止まない。どうか、どうか、それだけは・・・

「礼を言う。ありがとう」

冷たい言葉だけを残して、敵対者は去った。

第2幕　「臆病な少年・大地立也」　2－1　「帰宅」

「それじゃ」
「うん、じゃね」
「ばいば～い」

零と分かれて、歩と2人になる。

「楽しかった～零君、あいっかわらず音痴だし」
「はは、そだね」
「どした？なんかテンション低いぞ？疲れちった？」
「いや・・・あ、うん、ちょっと疲れたかも」
「まぁ、あんだけリンダリンダ歌えばねぇ・・・何回？3回だっけ？」
「・・・4回」
「あっはは、普段もあんだけ声張って自己主張してくれると、私もタツの代理人の重荷を下ろせるんだけどなぁ」
「べ、別に・・・・・・頼んでない・・・」
「はぁ、そういうこと言う？言っちゃいますぅ？学級委員押し付けられそうで困ってたのを救ってあげたのは誰だったっけ？」
「・・・・・・木森歩様です。その節はお世話になりました」
「よろしい。じゃ、またね！元気出せよ！明日っから希望に満ちた高校生ライフが始まるんですからね」

姉と弟みたい、よくクラスメートに言われる、その感想を一番多く、強く感じてるのは立也本人だ。

「うん、じゃ・・・・・・また」

2―2　「襲撃」

「ただいまぁ・・・」

いつも元気ではないが、明るく言う帰宅の言葉も今日はへなへなだ。実際立也はくたくただった。

「父さん？・・・・・・買い物かな」

案の定、居間のテーブルには書置き。ロールキャベツにしようとしたが、キャベツ忘れた。別にハンバーグでいいじゃない、どうせ作るのは主に僕なんだから、と思いながらも、ロールキャベツが食べたいくせにキャベツを忘れる父の微笑ましさに少し気分が上昇する。

試験も終わり、数日来続いた勉強の日々から開放され、居間で寝転ぶ。制服の内ポケットを探って、そこにいまあるべきでない紙を2枚取り出す。

「はぁ・・・・・だめだなぁ、僕・・・」

眠気に襲われて、目を閉じる。もう、眠って忘れよう。いいよ、頑張った。

まどろみが本域の眠りに差し入る寸前、全身に怖気が走って飛び起きる。

「だ、だれ、なに！？」

全身に鳥肌が立っている、冷や汗が止まらず、ひどく寒い。なにか

はわからないが、なにかがそこにいる。いつも父さんと食事をする居間、チャンネルを取り合う居間。だが目の前の部屋は全然別の、得体の知れない、なにしろよくないものに侵されていた。

「で、出てって！で、出て行ってください」

ふるえながら窓を開けて言う。ともかく気が動転して、早くどこかへ消えてほしかった。早くあの居間を返してほしい。もうなんでもいいから、どこかへ行ってほしい。窓を開ければ霧散すると思った。

だが、気配の密度はむしろ高まっているようだった。このとき冷静な人間がいて視覚的に状況を判断したなら立也の様子は異常以外の何者でもなかったが、猫か狐でもいれば、総毛立てて飛んで逃げただろう。そして、もし猫さんがそんな異常な様子で逃げ出したなら、立也もつられて逃げ出せたはずだ。だが、生憎猫はいなかったので、立也は蹲り、目を瞑る、という形で目の前の現実から逃げた。

ここにおいて、立也の命運は彼の手を離れ、長らく手元に戻らなくなった。

2―3　「大地守」

「・・・や・・・つや・・・たつや！・・・・立也！」

目を覚ますと、守に抱かれて心配そうに覗き込まれていた。あれれ、と立也は周りを見渡す。いつもの居間だった。黒い気配の痕跡など全然見受けられない。

「なんか、怖い夢見てたみたい」
「オレのほうが怖かったわ。ぐったりして全然起きないんだから」
「ごめん。なんか今日疲れてて」

そう、大分疲れていた。朝からずっと緊張していたし、試験もあった。カラオケでもずいぶんエネルギーを使った。夢でよかった、と思いつつ、一寸頷ききれないものを感じたが

「ホントびっくりさせんでくれよ、せんせっ！キャベツ買って来やしたぜ」

心からホッとした様子の父の笑顔と、その顔よりもおっきなキャベツを見て、立也も胸が温かくなった。

2―4 「異変」

「行ってきます」
「おう！今日も一発ぶちかませ！」

また、わけわかんないことを。変なお父さんだなぁ、僕の父さんは、なんて思いながら集合場所へ向かう。集合場所には零が待っていた。

「零君、おはよう」

いつも先にいて、挨拶をすると、やっと来ましたか、という感じ（これも長年の積み重ねでようやく感じ取れる微々たる変化なのだ）で挨拶を返してくるはずが、今日は返事がない。

「零君？」

零はじっと立也を見つめていた。立也と零は幼稚園の頃からの仲で、給食も受験も一緒に経験してきた。ほとんど動きのない零の表情でも立也はなんとなく感情が読み取れた。でもいまの零を立也は理解できない。こんな零をみたことがないような気がした。どうしたの、と聞きかけたとき、背後から声がする。

「おはよーごめん、ちょい遅刻かな？」

歩も小学生の頃からの仲だ。特有の鋭い洞察で、時々零のことを自分よりもわかってる、と思うこともある歩。歩にならわかるかな、と振り向いた。

「おは、よ・・・どした？変な顔しとるぞ」

立也のピントは、いぶかしみながらこちらへ歩いてくる歩ではなく、その後ろから付いてくるものに合わされている。

人間の身の丈の2倍はあろうかという、でかい、ハエだった。

「あ・・・・うぁ、歩ちゃん！後ろ！後ろ！」

「え一っ？・・・なに？脅かしてんの？もうやめてよ、私そういうの嫌いなんだから」

平気で振り返り、またこちらに笑みを返す歩。

言葉を失い、血の気も失い、眩暈でくらくらする立也に追い討ちをかけるように、ハエはこちらに前足を振り、にこやかに「おはようございます」と言った。振り上げられているのは左足だった。「おはようございい」までは聞こえた。ハエが「ます」まで発したのかは立也にはわからない。

「た、タッ！？」

「立也！」

立也は何も言わず、鞄も取り落として、全力で走り去った。

動転して走り続ける立也は、自分の世界が一変していることを知る。ハエだけじゃない。アリみたいなやつもいたし、ゲームでリザードマンとかいって出てきそうなトカゲの化け物、道の端から端まで占領してるカエル、宙を泳ぐ魚らしき生き物。見たことあるようで、全然知らない生き物があちこちに、当たり前のように。

その上その変化に戸惑っているのは自分だけのようだった。みんな

元々こんなのが見えていて、だから無反応なのか、それとも全然見えてないから平気なのか。そんなことすらわからなくなりながらも走り続ける。

立也はなんとか大回りしながらも家に着いた。目を丸くする父に、今日学校休む、とだけ言って布団にもぐりこんだ。父にどう問い詰められても頑として閉じこもり、布団で蹲り、奴らが中に入ってこないことだけを祈って目を瞑った。

第3幕　「戦う少年・大地立也」　3－1　「袋小路」

「おじさん、今日タツは？」
「・・・ちょっと、今日も、行きたくないって。ごめんね、歩ちゃん」
「い、いえ。あの、元気出せよって言っといてください」
「うん、ありがとね。いってらっしゃい」
「はい、行ってきます」

布団に篭城して3日目。玄関先でのそんなやり取りを大地立也は情けない気持ちで聞いていた。

異形の生き物が家に入ってくることはなかったが、トイレや料理のために部屋をでて、窓から外を見るに、魑魅魍魎の徘徊は続いていた。寝て覚めたら消えると思っていた。そのうち誰かか何かが何とかしてくれて、笑い話になると信じて3日。どうやらどうにもならないようだ。

「立也、父さん仕事行くな。戸締りしっかりしろよ」
「・・・・・・・父さん」
「うん？」
「・・・・・・帰ったら、話聞いてほしいんだ・・・」
「うん、今でもいいよ」
「帰ったらでいい、ありがとう。いってらっしゃい」
「・・・・・・うん、行ってます」

守に相談してもなんにもならないとはわかっていたが、立也に打てる手はそれくらいしかなかった。今度こそ眠って起きたら、化け物どもが消えていますように、そう願って立也は眠った。

3－2　「決意」

ピンポーン

家のベルが鳴って、立也は目を覚ます。最近一日中布団にいて眠っているが、些細な拍子に逐一目が覚めるので、結局は常に眠い。玄関に行って、返事をする。「私」と歩の声がして、ほっとする。

「・・・やぁ・・・どうしたの？」
「どうしたのって・・・・・・元気かなって」
「・・・・・・・まぁ、あんまり元気ではない・・・・かも」
「そうだよね、でないとガッコ休まないよね・・・」

いつも元気な歩がしょげていると、とても悲しい気持ちになる。いっそ話してみようか、でもわかってもらえるとは、思えないし、ふざけてると嫌われてしまうかもしれない、と二の足を踏む立也をよそに、歩は緊張しながらも、しっかり自分の目的を遂行する。

「あ、あのさ、映画行かない？その、あれ、気分転換的なあれで」
「映画？」
「うん、これ」

歩の出したチケットは、数日前立也が誘うはずだった映画のものだった。結局、あのチケットは自室の机の引き出しにしまわれ、思い出すたびに暗くなるから捨ててしまおうか、というもう思い出したない遺物となりつつあった。バケツの水を浴びせかけられたようにハッとして、それから立也は自分がとても情けない奴だと思った。

思えばずっと大地立也はそういう人間だった。遠足の班分けは誰か

に誘ってもらえるまで独りぼっちで待っていた。運動会の種目も係りが割り振るのをただそのまま受け入れた。折角チケットを買った映画にも誘えなかった。黒い気配を前に、追い出そうとするでなく出て行ってくれることを願った。目の前の異形を前におびえるしかできてない。

歩は違う。遠足では誘ってくれて、運動会でも１００m走に名乗りを上げ、いま、こうして映画に誘ってくれる。立也は改めて歩を尊敬し、見直し、そして多分結構、惚れ直した。

「ありり・・・こういうの好きかなって思ったんだけど・・・外した？」

硬直して動かなくなった立也に困惑しながら、歩は恐る恐る聞いた。それに答えるために顔を上げた立也の眉はまずらしく逆ハの字にキリッと力が込められていた。

「行く。行くよ」

立也のはっきりした口調に戸惑いながらも、歩にいつもの笑顔が少し戻った。

3－3 「初陣」

案ずるより生むが易しとは言うが。

「どうも、こんちわ～おでかけですか～？若いっていいですなぁ」

ハンプティ・ダンプティみたいなまるっちい異形に声をかけられながら、立也は馬鹿馬鹿しいやら、ほっとするやらで忙しかった。異形の連中は、確かに中には、眉根をよせざるを得ない不思議なやつや、正直気味の悪いものもいた。しかし、なんというか、みな普通なのだ。外国では道行く人同士がちょっとした挨拶をするなんてことがあるらしいが、なんだかそんな感じで、互い互い平々穏々に通行している。まぁ、さすがに映画の最中批評をぼそぼそ言ってるのには閉口したが。

「どしたの？さっきからきょろきょろ」

出掛けの隠々滅々とした表情が嘘のように朗らかになった立也を、歩は不思議そうに眺めている。

「ううん、なんでもない。歩ちゃん・・・ありがと」

「えっ？な・・・・・・うん・・・っていうかお礼言うの遅いから！この私がデー・・・・・・いや、映画誘ってあげたってのに！」

歩にいつもの元気が復活したのを感じて、立也もいよいよ復活する。帰ったら守にも元気が戻ると思うと、早く帰りたい気がして早歩きになりかけるが、もう少し歩と歩いていたいと思って、歩を緩める。そうしながらも着いてしまった別れの曲がり角。

「じゃ、明日、いつもの場所でね」
「うん。あの、ホント、その、ありがと」
「ば、ばーか！・・・・・・バイバイ」
「うん、また」

照れ隠しの悪口が耳に心地よく残る。「ひゅーひゅー」とはやし立てるカラスの異形は無視だ。さぁ帰って父さんを安心させよう、と走って帰ろうとしたそのときだった。

『止まれ』

と誰かに言われた気がして、立ち止まる。次の瞬間、

ドガーンッ

飛んできた、目の前通過した、ブロック塀に当たって転がった。自動販売機が。

「・・・・はっ・・・・・えっ？」

驚いて飛んできたほうを見遣ると、そこにいたのは、二足で歩く犬というか、犬の顔をした人間というか、まさに異形だった。カラスの異形は「ひゅーひゅー」言いながら飛び去った。立也は自分に翼がないことをかなり本気で恨む。

犬の異形はゆっくり近づいてきた。ゆらゆらまっすぐ歩かない様はまるで酔っ払い、というかゾンビみたいだった。「あの、なんですか」「じ、自販機投げるなんてすごいですねぇ」とかいろいろ話しかけるが、犬の異形には全然応える気がないようだった。

ようやく直感が危険を告げ、立也は走り出す。すると犬の異形は四つんばいになって追いかけてきた。どうやら基本は犬らしく、その方がずっと動きは俊敏で立也は簡単に回り込まれた。逃げることは難しいようだ。

「ねぇちょっとあれ・・・」
「でか！警察警察。いや保健所？」
「ねぇ、あの子まずくない？」
「よせって、警察に任せよう。隠れてないと、俺たちも危ないって」

通行人が話すのが聞こえて驚く。犬の異形は立也以外にも見えているらしい。だが、犬の異形は通行人には目もくれず、飽くまで興味があるのは立也だけのようだった。警察を呼んでくれたようだけれど、間に合うとは思えない。さっきから少しずつ間合いを詰められており、犬の口がガオーと・・・いや、

ガバーーーーーっと

開いた。カバの欠伸なんてかわいいものだ、ネズミを丸呑みする蛇なんでレベルじゃない。口を開く予備動作がなければそれとはわからないような、短絡的にドでかい虚空が広がっていた。これに喰われれば死ぬなんてもんじゃすまないとさえ思ってしまうほどの異様。

犬はそのまま、前足に力を込め、おびえる獲物に襲い掛かった。立也は立ち尽くし、目を見張り、零と父、それに一際強く、歩のことを思った。虚空が立也を飲み込む一瞬前、

「『光』」

立也はさっきの声が再び胸で鳴ったのだと思ったが、その実、言葉

を発し、空気を揺らしているのは立也自身であった。それに気づくも間もなく、立也の胸から凄まじい閃光がほとばしる。

「きゃうん」

と犬が犬みたいな声で鳴き、たじろぐ。

『蹴っ飛ばせ』

声に言われるまでもなかった。今の今まで自分の命に牙を突き立てていた敵に立也は無意識で思いっきり右足を振り、犬の顔真正面にぶち込む。

「ぎゃわん」

犬はすさまじい勢いですっ飛んで行き、３０メートルくらい向こうの突き当たりのブロック塀に嫌な音を立てて衝突した。死んだのが一発でわかる。

「な・・・なに・・・」

気味の悪い衝撃音で瞬時に我に帰り、目の前の状況と、それを引き起こした数秒の行動が喚起される。自分のしたことが信じられず、目を疑い、足を疑い、怖くなって、駆け出そうとしたが、立也の足は空転、いやそもそも足は動かなかった。

意識を失う最後、背後に誰かがいるという気配は感じた。

第４幕　「不幸な少年・大地立也」　４－１　「天津基」

気が付くと立也は自分の寝室で寝ていた。起き上がると、そこには見慣れぬ男がいる。

「おはよう」

「・・・お、はよう、ございます」

その男が嫌味も脅しもなくあんまり普通に挨拶するものだから、立也もつい返す。立也の顔に書いてある「Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ？」に答えるように男は言う。

「私は天津基という。死霊だ」

シリョウという言葉にひどく不安になる。資料とか試料の方の抑揚でなく死霊の方のイントネーションだった。不安そうな立也の表情を見て、男はやっぱり、みたいな感じで少し残念そうにする。

「そうか、そこまでの交流はないのか・・・・・・いや、心配しなくてもいい。私は君の敵ではない。いや・・・・少なくとも私から君を傷つける意志はない。」

喧嘩を売るとしたら君の方だ、という言い方が腑に落ちないが、一応ほっとする。ほっとすると同時にここが自宅であることに気が回る。

「と、父さんは？」

「隣の部屋で眠ってもらっている。安心したまえ、私の干渉術で睡眠を誘導しただけだ。命に別状ない。」

襖を開けて確かめると、確かに守は静かに眠っていた。乱暴された様子もない。あの元気溌剌の父をどう静まらせたのか。自室に戻って襖を閉める。

「君にはいろいろと辛い話をしなければならない。でも、君がこの先、生き残るには必要な知識だ。静かに聴いて、そして信じてほしい。」

死霊とか生き残るとか、なんとも不穏な人だ。

「それはあの犬みたいな奴とも関係するんですか」

「もちろん。あれは死屍(ししゃ)という。死霊と同じく死者だが、精神が著しく不足している点で死霊とは違う。」

「シシ？シシャ？」という顔で聞く立也の前に、基は腰を据え、とうとうと自説を語り始めた。

4－2　「世界の在様？」

「世界にはいろんな生き物がいる。草、虫、ネズミ、犬、サル、ヒト。これらは生命として”生きている”わけだが、”生きている”ということの本質がどこにあるか、と考えたことはないかな？」

「生きていることの本質・・・？」

「そう、なにを持って”生きている”といい、なにが欠けていると”生きていない”、ことになるのか。」

「そう言われても・・・生きてるものは生きてるとしか・・・」

「・・・まあ、数日前の君ならそうだろう。でも今はどうだい？君以外の人間には視えない化け物、精神の閃きをその行動に感じない犬の異形。あれらを君はどう見る？生きている、と感じなかったかい？犬が壁に当たってつぶれたとき、殺してしまった、と感じなかった？」

「・・・・・・」

沈黙を肯定と捉えた基は続ける。

「うん、僕に言わせればあれらも”生きている”。ただ欠けてしまっている部分があるというだけでね。では、なにが”生きている”ということなのか。」

ようやく最初の質問の意味が取れてきたが、結局答えは立也の中にはない。そもそも答えがあるのか、と思ってしまう。

「魂。まぁ、魂といっても、これは僕が名付けただけで、オカルトと混同しないでおくれよ。それが答えだ。現状信じてもらうしかないが、いずれ干渉術に長ずればわかるようになるはずだ。”生きている”存在にはあまねく、それこそアリの一匹一匹、隣の犬、斜向

いの犬、君のお父さん。それから、君が目にする化け物たちにもあるし、さっきの犬にも、あった。そして、壁にあたった瞬間、失われた。それが死だ。”生きてない”ということだ。」
「そういわれても、あんな化け物に魂・・・」
「魂というのは便宜的に私がそう呼んでいるだけだ。私が言っているのは、我々が”生きている”と感じるものには、共通して備わるものがある、ということだ。」
「それを魂と呼ぶ・・・と。」
「そうだ」

少なくとも現状、異形たちについて何も知らない立也には、そうなんですか、としか返しようがない。

「じゃあ、僕にもあるんですね？その、魂が」
「・・・・・・あぁ」

なんだろう今の間は、という立也の困惑に気づいて基が言いづらそうに口を開く。

「・・・君に聞いてほしいのはここからだ。」

4－3　「世界の在り様？」

「僕の知る限り、魂は”生きている”ということに対してほとんど必要十分条件だ。だが、どんなルールにも例外がある。」
「どんなものにも宿ってるって言ったばかりじゃないですか」
「まあ、そうだが、そうとしか考えられない人物が1人いる。」

すごく嫌な予感がする。

「・・・・・・もちろん、君だ」

・・・どう反応していいのかわからない。最初っから最後まで全部嘘っぱちで、単に自分を惑わせようとしているようにも思うし、全部本当でとんでもない告知を受けたようにも思う。だが結論はいずれにせよ、同じ言葉だったから、それを口にする。

「信じられない、というか、わけがわからない」
「・・・・・・だが恐らく事実だ。目に見えない化け物、いや私流に言うなら死霊、が見えるようになったのも、犬の死屍に襲われ、撃退できたのも、すべては君が君自身の魂を失ったからだ。」

思い出される。化け物、いや死霊が見えるようになる前の日。そう、期末試験の最後の日。チケットが渡せなくて、居間で寝てしまって・・・あの時、あの時、僕はあの黒い気配になにをされたのだろう。夢じゃなかったのか。いや、夢でないことは、既に知ってるじゃないか。だって世界が変わったのはあの時からなんだから。

「立也君。しっかりしたまえ」

基に声をかけられて我に返る。背中が汗でびっしょりだ。

「なにか思い当たることがあるんじゃないか。話してほしい。力になれるかもしれない。いや、なれなくても・・・・・私には君を守る義務がある」

「どういうことですか」

「・・・・・今は、聞かないでくれると助かる」

基はひどく言いづらそうだったし、今はそれよりも黒い気配になにをされてしまったのかを聞いてもらう方が先だと判断し、その事を基に話してみた。

聞き終わると基は、今にも泣き出しそうな顔になって、顔を伏せた。

「やはり・・・そう、か」

不安に苛まれ続けて、そろそろ立也の神経は限界に近い。どういうことなんですか、と少し苛立ちながら問質す。

「君はやはり例外の1例だということだ。君は多分『たまかけ』にされた。」

「『たまかけ』？」

「精神・肉体を適切に備えながら、それでいて魂を持たない、いわば抜け殻の状態。原理的にはありうる存在・・・・・というより原理的にしかありえそうもない存在だ」

自分が抜け殻だといわれてもしっくりこない。実際今こうしてものを考えている自分は何なのだ。意を察して基が言葉を次ぐ。

「思考・感情は精神によってなされる活動だ。魂はあくまで、その

存在に付きまとう証明書のようなものだ。実質的な機能はほとんど持たない。」
「その証明書、魂っていうのがないなら、どうして僕はいまここにいるんですか」
「それは・・・・・・」
基はいっそう言いづらそうに、でも立也の目をしっかり見て言った。
「別の人間の魂が代わりに中にあるからだろう。」
「別の？」
瞬間、犬の死屍と戦っているときの声を思い出す。もしやと、まさかがせめぎ合う。ともかくも心に浮かぶ質問をぶつけてみる。
「じゃ、じゃあ、僕の魂はどうなったんですか」
「多分今君の中にある魂の代わりに『たまのみ』にされて、魂蔵（たまぐら）の中だ。」
「『たまのみ』？魂蔵？」
「本来生者も死霊も死屍も魂が滅び、次いで精神、肉体が朽ちる。だから、魂だけの存在というのは普通ではありえない。だが・・・原理的にはそういう存在がいてもおかしくない。それを私は『たまのみ』と呼んでいる。『たまのみ』はそれだけでは非常に不安定で試したことはないが放っておくと恐らく変質する。そこでそれを抑えるために『たまのみ』を入れる器が魂蔵だ」
「『たまのみ』・・・・・・」
「信じられないかもしれないが、私は実際に『たまのみ』を知っている」
「・・・・・その、魂蔵というのはどこに？」
「今の所在はわからない。魂蔵の形は自在だ。その黒い気配が持っていることは確かだろうが・・・」

なんだか気が遠くなってくる。不安で心が潰れそうになる。

「要は、結局なんなんですか。僕はどうなるんです」

「とりあえずの問題として、君は君の肉体・精神に他人の魂が宿った存在だ。そのせいでいろんな死者、つまり死屍と死霊に狙われることになる」

「なんでそんなことわかるんですか」

「私はもう1人君のような存在を知っている。彼も誕生以来いろんな死者に付け狙われている」

「じゃ、あの犬みたいなのにこれからも襲われるってコトですか」

「いや、もっと強力な死者も襲ってくるだろう。」

そんな、という顔で立也は固まる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8847u/

『たまのみ』

2011年10月9日10時09分発行